

推薦のことば

本書は、花田先生が記しているように“消化器が専門であるが、膵胆道系を専門としていない医師”に役立つ、実臨床に則した内容の提供を目指し、企画がなされている。

第1章にガイドラインの解説を配置し、作成に携わった先生方によるガイドライン作成の経緯、既存と現行の変更点、留意点が判りやすくまとめられている。多種類あるガイドラインをすべて保有し、これらをその都度探しながら臨床現場で使いこなしていくことは困難であるのに対し、1冊にコンパクトにまとめられており、使い勝手がよい。

第2章の日常よく遭遇する症状・徴候からの診断の進め方の切り口も役に立つ。症状、血液データからどのように考え、検査をどのように進めていくか解説されている。これらは、研修医、若手医師を意識した内容である。

第3章と第4章では、画像診断による疾患の鑑別ポイント、さらに画像診断の最前線を取り入れたことにより、“膵胆道系の専門医”にとっても興味深く読むことができる。

また、第5章に実践的な治療を取りあげたことにより、一般的なテキストとしてのみならず技術的にも学べる書籍となっている。

最後の第6章のcase studyでは、回答として異なる医師の意見が検討会形式で掲載されており実におもしろい。

最初から最後まで飽きずに読め、そして役立つ内容が満載である。通常、これだけの構成を目指した場合には「盛りだくさん」で分厚くなり、教科書的で読み難い本となりやすいが、本書は1つ1つの項目がコンパクトにまとめられているため読みやすい。工夫として、各項目の最初に概要を記載し、文中にmemo, pitfall, コツを上手に配置しており、その企画力に感心する。また、執筆された先生方にも敬意を表する。

最近では多数の医学書籍が発刊されており、カラー版、DVD付きなど判りやすい工夫がなされている。そのなかで、月刊誌を年間購読する人は少なくなり、できるだけ1冊にまとめられた書籍を買う風潮となっているようである。昔は、学会誌、月刊誌など本棚一杯に並べて、その多さがステータスであったが、今ではインターネットで検索しPDF形式による保存やコピーが簡単にできるようになり、多数の書籍を

並べる必要がなくなっている。さらに、電子書籍が増えると本棚はほとんど必要なくなってくる可能性もある。

それでも「近くに置いておきたい本」はあり、本書はまさにその1冊であると確信する。

“消化器が専門でも膵胆道系は専門外とする医師”に役立つのはもちろんのこと、研修医や若手医師、そして“膵胆道系専門医”にも役立つ1冊である。

手稲溪仁会病院 消化器センター長

真口宏介